

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院看護福祉学研究科長 殿

主査 大友 芳恵
副査 三国 久美
副査 中村 和彦
副査 小林 正伸



このたび 米田 政葉さん にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

1 学位論文題目 若者に対するひきこもりの発生防止と早期支援に関する検討

2 論文要旨 すでに配布のとおり

3 学位論文審査の要旨

“ひきこもり”が社会問題化されて以降の現在も狭義のひきこもりの該当数は減少しておらず、従来行われているひきこもり支援だけでは不十分であり、ひきこもりの発生防止も視野に入れた新たな手立てが必要であるという問題意識のもと、①ひきこもり親和性に関する検討およびケースコントロール研究を行い発生予防に向けた基礎的知見を得る、②ひきこもり経験者へのインタビューを行い、当事者の視点からのひきこもり早期支援に向けた示唆を得ることを研究目的とし、量と質の複数の方法を用い重層的に“ひきこもり”予防と支援を検討した意欲的な研究である。

本研究ではひきこもり経験者の多くが相談する相手が学校・家庭・地域のいずれにもいないということ、また、ひきこもり経験者の半数以上にひきこもり後に自閉症スペクトラム障害などの精神障害の診断がなされていることが明らかになっている。これまでの内閣府等の各種行政調査において捕捉されているひきこもり者数には、統合失調症の診断を受けているものや、ひきこもる以前に身体・知的・精神障害の診断を受けているものは対象外とされている。しかし、本研究におけるひきこもり者の実態はひきこもりの後に自閉症スペクトラム障害などの診断を受けている者も多く、ひきこもり発生には学校、家庭、生活習慣の乱れ、乳児期の対人関係問題などに加えて、自閉症スペクトラム障害などの多様な要因が関連しており、発生防止のためには早期から医療・保健・福祉や教育機関等の関連機関のトータルな連携の下での発生防止策が必要となる事が示唆されている。また、支援においては、ひきこもりをパワーレスとのみ捉えることなく、ひきこもり当事者の内にある罪悪感や現状への危機感、家庭の居心地の悪さなどの心情理解が必要であり、自分を否定しない他者との交流による自信の回復や外出に向けた意欲の高まりに通じる「重要な他者」との出会いが当事者のエンパワーに通じることが示唆されており、貴重な知見に通じるものであり、今後の継続研究によって当該研究分野への貢献が大いに期待される。他方で、質的研究部分の分析と考察の弱さがあり課題の明示にとどまらないインパクトのあるオリジナリティが発揮できるさらなる研究に期待したい。本審査委員会は総合的に判断し、本論文は博士論文としての水準を有しており博士の学位を授与するに値するとの結論を得た。

4 最終試験の要旨

審査は、プレゼンテーション、質疑応答、博士論文審査基準による評価、審議というプロセスを経て行われた。

プレゼンテーションは内容が明確に伝わるものであった。審査委員からの質疑応答も的確であった。本研究の発展に向けての質疑応答において、Engel, G.L.が提唱した「バイオ-サイコ-ソーシャル (BPS) モデル」や、Antonovsky, Aによる「健康生成論」やその中核概念である「首尾一貫感覚」(Sense of Coherence) といったすでに一定の評価を得ている考え方等を持ち出し考察を加えていくことが説得力を増すなどの意見があった。

審査の結果、本学位論文がこれまで十分に組み込まれていない内容についてエビデンスをもって明示しようとしたことや取り組むべき多くの課題が明確化されたことなど、一定程度の独創性を有していると評価され、今後の発展性も期待される価値を有することを全審査委員が一致して認めた。

以上の結果、米田政葉は 博士(看護学) 博士(臨床福祉学) の学位を授与する資格が ある ないと判定する。